

# 『樊 噲』小 考

— 笙を吹く樊噲の意味 —

平 田 澄 子

## 序

上田秋成の小説『樊噲』は、力強くスピーディーな文体で一人のあぶれ男の魂の軌跡を鮮烈に描き出した、『春雨物語』集中の悼尾を飾るにふさわしい傑作と言えよう。「放埒」にして「にくさげ」なる

ものとして、当代の読者に拒否されたという逸話を生むほどに並外れた親不孝者の無頼な放浪生活を描きながら、人間味豊かな、また、繊細で崇高な魂の側面を照らし出した作品は、これまでの日本文学の中に、ほとんど例がなかったのではないだろうか。

ところで、秋成よりは十八年先にこの世に生れ、一時期重なる時代を生きた俳人蕪村に

追剝を弟子に剃りけり秋の旅（安永六・九・七）

という一句があり、すでに中村幸彦氏が「秋成に描かれた人々」の中に触れておられるところである。句は秋の旅の途中、襲ってきた追剝を改心させ、弟子にしてやった高僧の思い出を詠んだものと解されている物語的な内容の句である。

秋成の『樊噲』も、主人公の大蔵が親を谷に突き落として逃亡し、中国の豪傑である樊噲の異名を取って山賊となるが、放浪の末に一人の旅僧に心打たれ弟子になるという物語で、両作品とも松島瑞願寺の中興の祖雲居居士の逸話が典拠の一つに挙げられている。それは雲居居士が旅中出会った強盗に持金二十両のうち十両を与えて別れたものの、すぐに戻って残りの金も渡したので強盗は改心し、弟子にな

つたという話である。<sup>注4</sup>

小説と句の典拠の一致は偶然である可能性が高いのであろうが、蕪村は安永三年正月秋成の成稿『也哉抄』の序を書き、秋成は四十代の頃、蕪村とその一門の人々と友好を深めていたと言われる。<sup>注5</sup> 彼ら共通の話題としてこのような逸話が取り上げられたことくらいはあつたかも知れないという想像は許されよう。周知のように、雲居居士については早く芭蕉も『奥の細道』の中に書いており、芭蕉、蕪村、秋成が共にその筆を刺激される程に雲居居士の事蹟はインパクトの強いものであつたのであろう。

と言つても、秋成が『樊噲』の構想を立てたのは蕪村の死から二十年近くを経っていた頃であつた。

『春雨物語』全編を脱稿したのは自身の死の一年前の文化五年、そしてなお死の直前まで推敲を続けた。即ち小説『樊噲』は作者の人生の最期を飾つた作品であり、中村博保氏は本編の成立について、秋成にとつての幸福であつたとともに、近世小説の世界にとつての奇跡であると評価されている。<sup>注6</sup> そして当然のごとく本編は、作者自身の晩年の心象風景を

二重写したものととして読まれるのが常であり、また事実秋成の小説の中では最も直接的にその老境を想像させ得る作品となつている。小説の随所に、同じく死の直前まで書き続けた随筆『胆大小心録』の記事と重なるところがあるのもその読み方が妥当であることを示していよう。例えば特に、小説終末部の、主人公が八十余才となりみちのくの寺で頓悟往生する場面について随筆と比較し、作者自身の魂の救済の問題として捉えることなどである。<sup>注7</sup>

本稿も、そうした読み方のひそみに習うもので、主人公の人物形象について作者の作意を探りながら、物語の中で一種不思議な明るさと軽妙な味わいを持つ「笙」のモチーフの意味を考えることによつて、最晩年の秋成の心の内をうかがい見ようとするものである。

#### 改稿への軌跡

『樊噲』は『春雨物語』中最も長編で、文化五年本の前半部に当たるところのみが、最終稿本と見なされている富岡本『春雨物語』に『樊噲・上』として

本文を残している。作者は後半部の改稿を待たずに他界してしまったのか、下巻の改稿がどのようなところにあつたものか今知る事はできないが、ここではとりあえず改稿された富岡本上巻の本文と、文化五年本の前半部分本文とを比較することによつて、推敵に当たつての秋成の作意をより明らかにしてみたいと思う。

細かな語句の違いはさておくとして、状況・人物設定の上に見られる文化五年本本文と改稿本本文との違いで目立つところを以下の三点に絞つて、順次指摘・検討していくことにする。

1 まず、主人公大蔵が山から帰つて来た時の家族の反応を描くところであるが、文化五年本の方が男親と兄の大蔵に対する嫌悪感を救いようのないほど露骨に抽出していることに気が付く。父・兄の冷淡な態度は二本共に変わらないのであるが、五年本には、

「神にさかれて死たらんが、いとよかめり。  
ついにはおほやけに捕はれ、首刎られ、みみ  
づくとなりて人に爪はじきせられ、おやにい

みじき恥あたへつべし。」

「腕こきてなど神にはさかれざる。ひきやう  
なり。親兄に首つなかけられん。恐し。立か  
へりてよろこぶ者はなし」

と、憎悪に満ちた父と兄の言葉があり、主人公の、家の中の厄介者たる立場がリアルに表現されていると言えよう。親子の断絶、近親憎悪、現代においてならそれほど特別ではない社会の縮図となり得るが、当時の物語としてはこの親子の相克はかなり刺激的であり、当時の農漁村の二・三男問題の悲劇を描き出しているとの評価もなされている。<sup>注9</sup>

父親らの言葉に大蔵は返答もないが、男達の冷たさを敏感に感じ取っていることは、この後山賊の村雲に暖かな心遣いを見せられた時に「親兄のめぐみ、しかもであらば殺さじ。(あなたは)まことの親なり」と言っていることから明らかであろう。

一方富岡本では、  
父は持仏の前に膝をたかく組て、烟くゆる

せ空に吹きいたり。兄は山に出るとて、拐鎌とりて、「生へ帰りしは不思議の事也」とふもうるさし」とて、つらをきとにらみて出行く。

の如く、父・兄の大蔵に対する無関心な態度を描出して、彼等の無言の圧力を示すに留まっている。また、五年本で村雲に訴えていた大蔵の父や兄に対する前記の恨みがましいせりふも消えており、親子対立の構図は改稿にあたってややぼかされているように思われる。さらにこれに続く、大蔵の親殺しの場面も、改稿本は親の金を盗み追われる身となった大蔵のもっぱら力に任せた衝動的な行為（今はあぶれにあぶれて、親も兄も谷の流れにけおとして）として説明されている。彼がイダテン足で逃げ失せた後に父も兄も凍え死ぬのである。

五年本のこの場ははるかに血なまぐさく、殺伐としている。すでに追い来る兄と友一人を谷に突き落とした大蔵は、父親に「おのれ赦さじ」と鎌で肩を打たれ、あふれ出た血を見て

「子を殺す親もありよ」と父親を打ち返す。結局三人とも淵に沈んで死んでしまうのである。

そこで大蔵は恐ろしくなりその場から逃げ去る。この「恐しく思ひなりて」という心理描写が改稿本ではなくなっている。大蔵には親を死なせたという自覚もないのではないかという印象を強く受ける。そして以上のような比較によって見る限り、全体的に改稿本の方が親殺しの大罪も、やや大蔵の罪が軽くなる方向に向いていると見なすことができ、大蔵の悪漢たる面目は減じていることになる。

2 次に、大蔵を仲間に取り入れる盗賊村雲の登場するあたりの描き方についての変化を指摘したい。五年本では前項でも触れたように、村雲の親切に感じ入った大蔵がごく自然に相棒になつていくという展開であるが、改稿本は二人の出合いの初めから村雲には「下心」があり、それで何かと大蔵を助けるのである。勿論大蔵は喜んで盗人の手下になるが、自発的でないことを明確にしているところにまたもや大蔵の悪漢

的要素を薄めようとする作者の意図があるように思えるのである。

村雲と大蔵が意気投合するところにはかなり筆が加わっている。村雲の前身もより明らかに、二人でいれば怖くないとばかりに里の茶店で豪快に酒を飲み、僧形に変装した大蔵の姿に笑い転げる様が活写される。秋成が、主人公樊噲の形象にあたって参考にしたという『水滸伝』の中の人物魯智深の落髮譚がヒントになっているという部分であるが、その傾向は改稿本により著しく現れているといえよう。

推敲によつて加筆されたふたりの少々幼稚で滑稽な道中記は、小説の冒頭にある親殺しという深刻な事件を忘れさせる程に明るく野放図で、主人公が本来持っている筈の素直・純朴な性質を浮かび上がらせるための効果となつていくようである。

3 最後に、大蔵が村雲と別れた後に人里離れた一軒家に宿つた時の記述に改改のあることを指摘しておく。文化五年本の本文では、樊噲が宿

つた一つ屋の息子が外出先から手配書を持ち帰り、その人相書きを読みながら

「御僧にかたちよく似たり」

と言う場面があり、樊噲は、

「このむす子はよき人也。其子にころされし親兄も鬼にてこそありつらめ」

と笑つてその場を言い抜けるが、翌朝朝食を馳走されると、「さてもおそろしおそろし」と逃げるようにそこから立ち去ることになつている。ここには表面強気を装いながらも、内心では親を恨み、逃げるためのために汲々としているいささか矮少な人間が描かれていて、しかも冒頭で読者に強く印象付けられる親子の確執が、依然として樊噲に暗い影を落としていることも認められよう。

改稿本では一つ屋におけるこの挿話が全く消えている。代わりに善良な宿の老母と息子が樊噲を全く疑わず暖かくもてなすさまが描かれ、作者はこの親子を「義皇上の人と云ふに似たるべし」と書く。気持良く一夜を満した翌朝、樊

噲が「南無大師」と高らかに唱える声を聞き付けた芝刈の民は

「この家には鬼が入たるか。おそろしき声きこゆる」

と言いつつ覗き見るが

「僧はかかるぞたふとき。親の日がら也。よく供養申せ」

と言うだけで行ってしまう。宿の主と同じく純朴な山人が醸し出すユーモラスな一場である。

「はん噲もおかしき宿りして」とあるように、改稿本における一つ屋のエピソードは樊噲にあって心暖まる、一種の救いの場として用意されるべく書き改められたのではないかと考えていいのではないだろうか。

さて、以上三点の大きな推敲過程を見ると、秋成は主人公を極悪ならず者として描こうとする姿勢を次第に低くしているのであると理解されよう。下巻の推敲に至らず、作者は亡くなったかと思われるが、今残る五年本の下巻に相当する部分の本文に、推敲された上巻を置いてても全く矛盾がないのは、も

ともこの小説が主人公の精神の浄化をテーマにしていたからに違いないが、それにしても主人公の人間の魅力は改稿によって磨きが掛かっていることは否めないのではないだろうか。無頼、悪漢などという定義には納まり切れないスケールの大きさと、型破りに自由奔放な精神のあり方、それはもともと下巻の樊噲像に色濃く表われているものなのであるから、作者の改稿意図は十分果たされたといえる。

#### 笙の音と悟りへの道

誰からも、神隠しにあつたまま戻って来ないのではないかと思われていた、その大蔵が戻って来た時の父と兄の冷たい反応については前章1に記した。二人の男に比し、母親と兄嫁はやさしく労り、大蔵のしばしの改心と勤勉を喜ぶ。やがて大蔵は母と兄嫁の愛情を裏切り、母を力で押え付けて金を持ち出し、追い掛けて来た父親らと揉合い彼等を谷へ突き落とす結果となることも先の通りである。

こうして大蔵の逃亡生活が始まるが、「今樊噲」とあだ名され、やがて村雲に出会うあたりから本来

の彼の持ち味とも言うべきおおらかさと明るさが際立って来るようである。前述のようにその傾向は改稿本の方により顕著に現われている。

樊噲は山寺の僧を騙して髪を剃り、つんつるてんの衣を着て村雲にからかわれてははしゃいでいた。

一人で野中の一軒家に宿を借りた時には、純朴な母子が性悪な商人に一両小判を騙し取られそうになるのを救って（これは両本に共通する行為）、改稿本では極めて居心地の良い一夜を過ごすことになっている。変装したことによつて樊噲の心に余裕が出て来たということもあろう。人間の行動の善悪が心のゆとりの有る無しに左右されるものであることを改稿後の挿話がはっきりと示している。

さてこのように、改稿によつて付加された樊噲の明るく軽妙な人間像が、最も強く印象付けられるところは、何と言つても彼が冬の山中温泉で湯治の客僧から笙を習いこれを吹き歩く下巻部の一連の話であらう。

温泉宿の主は樊噲の連れである月夜・小猿が盗賊であることを見知っていたが、樊噲が彼等を子供扱

いしているのを見て安心し、宿泊を認めた。この時すでに樊噲にはある種の貫禄が身に付いていたといふことであらう。<sup>註11</sup>

彼は相宿の僧から「喜春楽」という曲を習い、その吹きようは「うまれつきで拍子よく、節に叶い、咽ふとければ、笙のね高し」というものであった。

「修行者は妙音天の鬼にてあらはれたまふや」と客僧は喜び感心する。

樊噲の音楽の天分がここで初めて示されるのであるが、習いたての彼の笙が僧を感動させたのは、その音色に類まれな響きがあったからであらうが、彼自身も自分の音楽に驚き、酔つたようになつていく。ただし、「今一曲」と誘われても「いな、一曲にて心たりぬ。おほく覚えんは煩わし」と言つて一曲以上習おうとしないのは無欲なのか骨惜しみか。<sup>註12</sup>

湯の中でも笙をささげて吹き、粟津という加賀の城下近くの市へ行って人込みの中でも夜昼吹き遊ぶ。<sup>お。</sup>

「さてもさても妙音也。ただ一曲にとどまりたまふ、また妙也。我はよこ笛吹く」と、よこ笛を吹き

合わせる市人もいる。土地の富豪であるこの人の家に招かれ、箴策を吹く人と何度も合奏し、ここでも人々を感動させる。

一応「小猿、よく見とどけおけ。この家も宝あつけたるぞ」と言つてはいるものの、管弦の誘惑には叶わない。吹けば吹くほどに感心され、その様子は一向宗の一心念仏の境地に例えられている。

雪深い立山の地獄の中で、食べ物乞いに現われた餓鬼が樊噲の吹く笙の強い音に驚き退散する場面は特に幻想的で、雪雲の間から樊噲に一筋の光明が差し込んだかのように思わせられる。

さて次に村雲に再会し、魚津の浮島見物に連れ立つが、ここでは村雲が乗った一つの浮島を力任せに岸から突離し、驚く村雲には目もくれずに笙を高くに吹き遊び、笑いながら立ち去つて行く。

笙に関わるエピソッドは以上で終るが、作者は鬼のような樊噲に音楽の才を付加し、その天分の開花によつて彼の魂が浄化され行くさまを描きたかつたのではないだろうか。樊噲は思い掛けない自分の笙の音の素晴らしさに酔い、忘我の境地に至つてしま

うのであろう。最後の、村雲に対する悪戯も全く他意の無い衝動的なもので、村雲にしてもどうという被害を被つたわけでもなさそうである。翌朝また行き合つた時、村雲は「おのれ、恩しらずめ。命得させ、金百両あたへしには、親ともたのみつると云ひし。(傍点部に当たる所は最終校本に無く、当然改稿余地のある所)を忘れ、我を水上に離ちたる、ゆるすまじきを」と憤りながらも「今は思ふ所あれば」と許している。村雲は樊噲の威厳に屈服してしまつたといえる。再び連れ立つて行く二人の姿はさながら「寒山拾得図」を見るような趣がある。宝曆から寛政期にかけて特に上方に流行したという、狩野山雪や曾我蕭白などが描くところの怪奇画の一種である「寒山拾得」の図である。樊噲と村雲の風貌を文脈から想像するとまさにびたりとそれらの図に重なるようである。従つて鬼と妙音菩薩の取り合せも単なる皮肉やユーモアではなく、樊噲が合わせ持つた野性と聖性にそれぞれ対応するものと見なすことができるであらう。



「笙」という楽器

それにしてもこの作品で秋成が笙や箴篳という古楽器を選んだのはなぜなのであるか。全く恣意的に用いたというのではなさそうである。

考えられる理由の一つとしては他の部分での関わりと同じく、『水滸伝』からの影響ということがあ  
る。『水滸伝』の中で好漢達の奏する楽器はだいた  
い笙であるといえる（七十一回、八十回、八十一回  
など）。特に八十一回は遊女李師師と好漢燕青が簫、  
阮などを争い奏でる艶治で楽しい場面である。<sup>注14</sup>『水

滸伝』に笙、簫などと表記されているこれらの楽器  
の実態をここで改めて詮索する用意はないが、『焚  
燗』においてもそれは匏簫、笙とあいまいな表記で  
あり、また実態が必ずしも『水滸伝』の楽器と一致  
する必要もないであろう。たとえ違いがあっても同  
種であることに変わりはないし、秋成の指向する主  
人公にふさわしい楽器として文字ずらから一応のヒ  
ントを得たということが想像できるというだけのこ  
とである。

「匏簫」は笙とは別物とのことであるが、秋成は

鳳笙の積りてこう書いたのであろう。<sup>注15</sup> 鳳笙は笙の美  
称である。

以前に秋成は「笙は鳳凰の声、笛は龍のなく音じ  
ゃとは、誰が聞いてのたとへごと」（『諸道聴耳世間  
猿』・巻四・冒頭）と書いており、遊び事は音楽よ  
り芝居に如かずという論旨の中で笙や笛を否定的に  
扱ってはいるが、それへの関心は前々からあったこ  
とが分かる。そして笙が鳳凰の鳴き声を模して作ら  
れた楽器であるという伝説も認識していたのであ  
う。

萱沼紀子氏が『秋成文学の世界』で、立山地獄で  
餓鬼が退散した事件は、笙の音色にある神秘的な力  
を語っていると指摘されるように、仏教美術におい  
ても「笙」は天上来で天女の奏する楽器の一つであ  
るし、文学の世界でも特に中世以後は神秘的なイメー  
ジを持った存在になつていようである。

それは大江定基（寂昭法師）が臨終の時に仏の来  
迎するさまを詠んだという詩句

笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上 聖衆来迎す落日の前  
に因るものらしく、『発心集』『宝物集』などの説話

によつて世に広まったこの一節は、『平家物語』、謡曲の『実盛』、『誓願寺』などにも引用されている。

謡曲『石橋』はワキ僧が大江定基であり、作中には「向は文殊むねの浄土にて常に笙歌の花降りて、笙笛

と、前記の詩句を利用した一章がある。笙は極楽の楽器であり、その妙音は人々を至福の境地にいざなう筈のものであつた。

明和四年（秋成三四才）五月大坂竹本座で初演された浄瑠璃『四天王寺稚木像』（近松半二・三好松洛ら合作）にも、笙の神秘性を物語る話がある。それを以下に略述すると、

1 用明天皇の皇子聖徳太子を親の敵と狙う、もと樂人の遺児で舎人の調子丸は、太子の引き籠つてゐる夢殿に近付くが、折から太子の吹く笙の音色を父の形見と聞き入るうち、思はず知らず呆然となつて討つことが出来ない。一方の太子は笙の音色から曲者の存在を察知する（初段

目・中——思はずしらず聞入て。心ゆるめば猶更に恨がごとく訴ふるがごとく。身にしみ渡る

妙音に、頭傾け。眠がごとく只忙然たる其有様。太子は笙の音色にて曲者有とさとし給ひ…）。

2 耳の不自由な与五郎（先の調子丸）に太子の吹く笙の音色が聞こえ、彼はその音に聞き入り再び呆然となる。そして笙の音の流れるうちに、太子の木像が動くという奇跡や、身代り、親子の死別れなどの愁嘆場が展開されるが、やがて真の太子が現われて、与五郎の病は太子が悪魔降伏の笙を吹き祈つた結果で、一旦の罪が許される今はまた笙の音によつてもとの耳に戻すと語る（三段目・切——…日外夢殿にて。我をねらふと知つたる故。悪魔降伏の笙を吹けば…けふ又笙の音によつて塞し耳を開きは。飛驒の内匠が所縁に免じ。一旦の科を赦す仁心…）。

のようなことである。

聖徳太子は仏に捧げる樂として笙を吹き、そのことによつて仏と繋り、事件を解決することができ善なる魔法の笛は、樂人であつた調子丸の父が

逆臣の守岩に頼まれ、天皇調伏の目的で吹いた時には効果を發揮せず、ために父は刑に処せられたのだつた。

この淨瑠璃の所演劇場の膝元である大坂の四天王寺建立の起源を語るこの史劇を、その頃堂島に住んでいた秋成が知ったか否かは別としても、同時代にいた作家達の両作品での、笙という楽器に対する意識やその扱いには共通するものがある。

勿論『樊噲』の「笙」のモチーフに關わる典故としては、すでに指摘されている『古今著聞集』卷六「管弦歌舞」、卷十二「偷盜」の説話群を視野に入れなくてはならない。これらは笙に限らず、音楽の靈威を語る説話のさまざまである。特に、笙の名手新羅三郎義光が豊原時秋に秘曲を伝授する話、盗人が博雅三位の筆箒を聴いて改心した話、海賊が筆箒に感涙を流して助ける話などが、樊噲の心象に投影されているという。音楽的感動が、作中人物のある行動を促す契機と成るといふ点では確かにどれも『樊噲』と無関係ではなからう。だとすれば同じように、筆箒吹き遠理が神に感動して雨を降らせる

話、小殿という強盜が、もとは石清水八幡宮の稚児で、武勇に勝りまた筆箒もよくし、所領争いで叔父を殺して大殿という強盜と仲間になる話などもヒントになつてゐるかも知れない。

『樊噲』は、芸術家の逸話を伝える説話に多い、音楽の芸術性に悪者が感動するという話ではなく、盜賊自身の音楽が他を感動させている話であるから、以上に挙げた説話の中では、最後の話に最も近いように思われる。

また、筆箒の嫌いな志賀僧正が名手の吹くその音に感涙を催し、「筆箒は伽陵頻の声を学ぶ」ということをそれまで信じなかつた自分を恥じる話も、樊噲が笙の音に魅せられて行く理由を考へる時に、大いに示唆的であろう。

『癸心集』には笙吹きの時光と筆箒師茂光の、愉快な説話（時光、茂光、数奇天聴に及ぶ事）がある。二人は囲碁を打ちながら楽曲を唱歌し、興に入るままに朝廷からの召しにも応じなかつたところ、帝は「さほどに楽に愛でて、何ごとも忘るばかり思ふこそいとやんごとなけれ。王位は口惜しきものな

りけり。行きても、え聞かぬこと」と涙を流し、戒めはなかつた。この説話は、数奇がこの世のことを捨てる頼りとなるものだという主旨のものであるが、数奇の具体的なものが音楽であるところ、また『樊噲』の笙のモチーフとの関わりが考えられよう。

秋成は音楽の持つ宗教的、神秘的要素、また特に笙や箏の持つ仏教的イメージなどが作品に齎す効果を承知しながら、笙の挿話を描き出したものと思われる。

山寺の僧から笙を習いこれを吹き歩くうちに、樊噲はひとときこの世の欲や悩みを忘れ、心の赴くままに生きる禪僧のような境地に近付くのであろう。中村博保氏註19がこの一章に内的転向の機縁、脱俗の機縁を認められている通り、この挿話以後、彼は村雲の上に立つ人間に変わっている。笙を吹く幸せな時間から現実に戻ると、泥棒の大仕事も大胆・的確にやりこなしはするが、物欲から夜盗を働いたのでないことは分配金の分け方で分かる。ただ、物欲を去つてもなお捨て切れないのが命であったから、盗みも

餓えないための手段なのである。しかも彼が願うのは百年の寿命であり、この執着を捨てない以上永遠に彼は救済されないところであった。しかるに丘の上の寺院の一件ですっかり弱気になった村雲と樊噲は遂に袂を分ち、那須野の原で樊噲は、ようやく自覚的に救済への道を歩み出すのである。

#### まとめ

樊噲が笙を吹く楽しみを得たことは、彼が傲慢不遜な青年から剛氣朴訥の民の仲間入りをし、悟りを開いて行く過程にあつて不可決の体験であつた。そして、その体験に至るまでの樊噲の粗野で手に負えない悪漢的性格は、作者が死の直前まで推敲していたらしい改稿本で、かなり弱まっていることを確かめ得た。これは作者の、主人公の性格形象に立ち向う姿勢に変化が生じた結果なのではないだろうか。魂の救済に向かつて飄々と荒野を駆け抜けて行く樊噲のイメージは、作者自身の最晩年の心象風景でもある。そしてそれは矛盾と混沌を抱えてこの世に生きる全ての人間の一生を象徴するものでもある

う。

秋成七十才頃の自画賛に、蝦夷の素朴な楽器を弄ぶ姿が描かれている。歌人小沢芦庵らの奏でる琴や箏の音に耳を傾けたこともある秋成である。笙に浮かれる樊噲の姿は書くことへの拘りを自身の「数奇」として、自己救済を計った秋成の見果てぬ夢であつたかも知れない。

注1 漆山本の筆録者・竹内弥左衛門（『日本文芸史・第四卷近世』参照）

注2 『中村幸彦著作集・才六卷』所収

注3 『蕪村全集』才一・発句（講談社）

注4 『上田秋成の文芸的境界』（鷺山樹心氏）日本古典大学大系『上田秋成集』補註等。

注5 『上田秋成年譜考説』（高田衛氏）

注6 日本古典文学全集『英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』解説

注7 『秋成文学の思想』（鷺山樹心氏）『上田秋成その生き方と文学』（大輪靖宏氏）『上田秋成の晩年』（牛山之雄氏）等。

注8 テキストは『校註春雨物語』（浅野三平氏）所収本を主とした。

注9 『逃亡の文学』（図説日本の古典『上田秋成』所収・松田修氏）

注10 『春雨物語』『樊噲』と水滸伝との関係（堺光一氏）等。

注11 中村博保氏注6の本文頭注。

注12 注2の論中にこのモデルについての考察もなされている。

注13 辻淋惟氏「江戸時代の怪奇画」（図説日本の古典『上田秋成』所収）

注14 『上田秋成の研究』（森田善郎氏）才5章十樊噲にも指摘されている。

注15 中村博保氏 注6本文頭注参照

注16 テキストは早稲田大学演劇博物館蔵本

注17 日本古典文学大系『上田秋成集』補註等。

注18 注6の本文頭注

注19 注18に同じ